

邵雍の詩に現れた白居易（前）

——受容と批判——

森 博 行

序文

一 履道

二 林下ならびに気味

三 閑人

四 快活の人

五 「安楽吟」と「快活」詩

（以上、前篇）

六 自在の身

七 五鳳楼と天津橋と金谷園と魏王堤

八 閑適と儉適

九 白衣と道装

十 白居易と邵雍

結語

（以上、後篇）

序 文

1

北宋の邵雍（一〇一〇—一〇七七）は、かれの詩集である『伊川擊壤集』（二十卷）に千五百首ほど詩を残しているが、邵雍自身が『伊川擊壤集』の序文において「予れ壮歳より儒術を業とす」と表明しているとおり、詩人としてより宋代の道学を開いた儒者のひとりとして著名であり、その成果は、畢生の大作『皇極經世』（六十卷）として今日ま

で伝えられている⁽¹⁾。実際のところ日中の学者を通じて、哲学の専門家による研究は、数多くあるけれども、文学の専門家による研究は、皆無に近い。日本人の文学研究者で邵雍を正面から取りあげて研究されている学者は、管見によるかぎり、わずかに上野日出刀氏ひとりにすぎない⁽²⁾。このような研究状況の中で、文学を専門にしている私が、邵雍に興味を抱くにいたったのは、詩に現れた「芳草」という言葉を調べていたとき、北宋の詩人の中で際立って邵雍が「芳草」を使用していることに、惹かれたからである。

このようないわば偶然の機縁に導かれて、邵雍の詩を読みすすめる過程で、邵雍の詩の中に、たとえば「陶淵明の歸去來を読む」(『伊川擊壤集』卷七)と題する詩のように名前こそ現れることはないが、白居易(七七二―八四六。字は樂天、香山居士と号した)の影がかなり頻繁に見えてきた。すでに『四庫全書總目提要』(卷一百五十三「擊壤集」卷二十)に、「其の源は亦た白居易に出づ」と指摘されているが、邵雍は白居易の影響を受けていたのではないか。これが拙文を執筆するにいたった動機の第一点である。

北宋の詩人と白居易といえ、蘇軾(一〇三六―一一〇二)が白居易の影響を受けていたことは、よく知られているが、邵雍と親しく交際していた司馬光(一〇一九―一〇八六)も、「独樂園七題・澆花亭」(『温国文正司馬公集』卷四)と題する詩において、次のように詠んでいる。

吾愛白樂天 吾れは愛す 白樂天

退身家履道 身を退きて履道に家す

釀酒酒初熟 酒を醸して 酒は初めて熟し

澆花花正好 花に澆いで 花は正に好し

作詩邀賓朋 詩を作りて 賓朋を邀え

欄邊長醉倒 欄邊に長に酔い倒る

至今傳畫圖 今に至りて画図を伝え

風流稱九老 風流 九老と称す

白居易は多方面にすぐれた才能を示し、足跡を残した人物といわれるが、その中でもとりわけ履道の退居、飲酒、賞花、作詩、友人との語らい、そして絵にまで描かれて伝えられた九老の集い、要するに白居易の表現を借用していえば「閑適」、これが司馬光の白居易に対する敬愛の所在である。司馬光と友人であった邵雍の場合、『伊川擊壤集』の卷六（五首連作）と卷十二に、それぞれ「閑適吟」と題する詩がある。詩の内容はともかく、詩の題名から見て、邵雍は白居易の標榜する「閑適」に興味と関心を抱いていたと考えられるのではないか。⁽⁵⁾これが拙文を執筆するにいたった動機的第二点である。

邵雍は白居易の影響を受け、とりわけ「閑適」に興味と関心を抱いていたのではないか。このような推測の上に立つて、白居易と邵雍ふたりの詩に共通して現れる言葉（以後、詩語と称す）のうち、キーワードになると思われるいくつかの詩語を手がかりにして、両詩の比較検討をおこなってみた。この比較検討をすすめる過程で、私は驚きを禁じ得なかった。改めて白居易の詩を念頭において邵雍の詩を読みすすむにつれて、邵雍は白居易の影響を多大に受けているという事実、しかも邵雍は白居易を受容しながら、もう一方では白居易に対して批判的であるという事実が、浮かび上がってきたのである。批判的というより対抗意識といったほうが、本質を突いているかも知れない。邵雍は白居易に対して、何か張り合っているように感じられるのである。

拙文の目的は、この比較検討の初歩的な報告である。題して「邵雍の詩に現れた白居易―受容と批判―」。なお、白居易の作品は『白氏長慶集』、邵雍の作品は『伊川擊壤集』（ともに『四部叢刊初篇』所収）を使用し、白詩の制作年次および経歴は、朱金城 校箋『白居易集箋校』（上海古籍出版社 一九八八年）に、邵詩の制作年次および経歴は、卓見による。

履道

漢の劉向（前七七～前六）が編纂した『說苑』（「反質」篇）に、戦国時代の思想家・墨子（前四六八？～前三七六）が弟子の禽滑釐に語ったという、次のような言葉が記されている。

食必ず常に飽きて、然る後に美きものを求め、衣必ず常に暖かくして、然る後に麗しきものを求め、居必ず常に安まりて然る後に、樂らけきものを求む。

人間というのは、衣・食・住が満たされると、より高次の衣・食・住、一般化して言えば、より高次の文化的生活を求めるものであることを、すでに西暦前四・五世紀の思想家は看破していた。「閑適」なる高次の文化的生活を送るには、それにふさわしい生活環境や居住空間が求められるであろう。墨子より時代的にずっとくだる白居易と邵雍との関係を考えるにあたって、「居必ず常に安まりて然る後に、樂らけきものを求む」、まず居住空間に関する詩語から始めることにする。

白居易は、穆宗の長慶四年（八二四）、五十三歳のとき、太子左庶子として洛陽に分司し、その後、中間に蘇州刺史、中央（長安）の秘書監、刑部侍郎などの職をはさんで、文宗の大和三年（八二九）、五十八歳のとき、ふたたび太子賓客として洛陽に分司することになり、以後、武宗の会昌二年（八四二）、七十一歳で致仕し、会昌六年（八四六）、七十五歳で亡くなるまで、洛陽の履道坊（里）（洛陽の東南にあった）に居を構えていた。司馬光の「澆花亭」詩にいう「履道に家す」である。白居易は、「履道の西門に弊居有り、池塘 竹樹 吾が廬を遶る」（「履道の西門」二首・その一）（卷六十九）など、この履道坊に構えた住居をしばしば詩文に取りあげて詠っているが、履道坊の明け暮れの中で、退居する前から役人でありながら隱者のような心持ちの中で生活していたらしい。長慶四年に作られた「履道の

新居二十韻（卷五十二）

- | | | |
|----|--|---------------------------|
| 18 | 攜茶上小舟 | 履道坊西角 |
| 17 | 移榻臨平岸 | 履道坊西角 |
| 16 | 兼有酒銷憂 | 官河曲北頭 |
| 15 | 豈無詩引興 | 林園四隣好 |
| 14 | 賓來輒少留 | 風景一家秋 |
| 13 | 僧至多同宿 | 門閉深沈樹 |
| 12 | 似到白蘋洲 | 池通淺沮溝 |
| 11 | 疑連紫陽洞 | 拔青松直上 |
| 10 | 窗筠綠玉稠 | 鋪碧水平流 |
| 9 | 窓筠綠玉稠 | 籬菊黃金合 |
| 8 | 紫陽の洞に連なるかと疑い | 籬菊 黃金合 <small>がっし</small> |
| 7 | 白蘋の洲に到るに似たり | 碧を鋪いて 水は平かに流る |
| 6 | 僧至れば 多 <small>まさ</small> に同じく宿し | 青を抜いて 松は直ちに上り |
| 5 | 僧至れば 多 <small>まさ</small> に同じく宿し | 門は深沈の樹を閉じ |
| 4 | 賓來れば 輒 <small>すなわ</small> ち少く留 <small>しばら</small> まる | 池は浅沮の溝に通ず |
| 3 | 豈に詩の興を引く無からんや | 風景 一家秋なり |
| 2 | 兼ねて酒の憂いを銷す有り | 林園 四隣好く |
| 1 | 榻を移して 平岸に臨み | 官河曲の北頭 |
| 0 | 茶を携えて 小舟に上る | 履道坊の西角 |

- 19 果穿聞鳥啄 果穿たれて 鳥の啄むを聞き
 20 萍破見魚遊 萍破れて 魚の遊ぶを見る
 21 地與塵相遠 地は塵と相遠く
 22 人將境共幽 人は境と共に幽なり
 23 汎潭菱點鏡 潭に汎びて 菱は鏡に点じ
 24 沈浦月生鈎 浦に沈みて 月は鈎を生ず
 25 厨曉煙孤起 厨は曉にして 煙は孤り起こり
 26 庭寒雨半收 庭は寒くして 雨は半ば収む
 27 老飢初暖粥 老いては飢えて 初めて粥を暖め
 28 瘦冷早披裘 瘦せては冷かにして 早く裘を披る
 29 洛下招新隱 洛下 新隱を招き
 30 秦中忘舊遊 秦中 旧遊を忘る
 31 辭章留鳳閣 辭章 鳳閣に留め
 32 班籍寄龍樓 班籍 龍樓に寄す
 33 病慙官曹靜 病みて官曹の靜かなるに慙い
 34 閑慙俸祿優 閑かにして俸祿の優なるに慙ず
 35 琴書中有得 琴書の中に得ること有り
 36 衣食外何求 衣食の外に何をか求めん
 37 濟世才無取 世を濟うに才の取る無く

38 謀身智不周 身を謀るに智は周からず

39 應須共心語 応に須らく心と共に語り

40 萬事一時休 万事 一時に休すべし

第7・8句「青を抜いて 松は直ちに上り、碧を鋪いて 水は平かに流る」、第19・20句「果穿たれて 鳥の啄むを聞き、萍破れて 魚の遊ぶを見る」、第23・24句「潭に汎びて 菱は鏡に点じ、浦に沈みて 月は鉤を生ず」などの一聯は、白居易の詩的感性がキラリとひかる、すばらしい句であるが、拙文の関心は、この詩に見られる白居易の隠逸的感情である。第11句の「紫陽の洞」は仙人の住居、第12句の「白蘋の洲」は江南の水郷である。長慶四年（八二四）、五十三歳、杭州の知事をしていたときの作「早春西湖閑遊（以下省略）」詩（卷五十三）の一聯に「西日は黄柳を竄め、東風は白蘋を蕩かす」と詠われている。白居易は江南の風景をこよなく愛していた。第21・22句「地は塵と相遠く、人は境と共に幽なり」や第35・36句「琴書の中に得ること有り、衣食の外に何をか求めん」の一聯は、陶淵明の「廬を結んで人境に在り、而かも車馬の喧しき無し。君に問う 何ぞ能く爾るやと、心遠ければ地は自のずから偏なり」云々（「飲酒」二十首・その五）『箋注陶淵明集』卷三）や「親戚の情話を悦び、琴書を楽しみて以って憂いを消す」云々（「帰去來の辞」『同右』卷五）などをふまえている。白居易は第36句において「衣食の外に何をか求めん」、衣食のほかは何を求めようか、と陶淵明の「親戚の情話」のかわりに、「衣食」をもってきた。衣・食・住さえ確保されれば、生きてゆくうえで十分だといふのである。いずれにしても第33・34句「病いは官曹の静かなるに慚い、官は俸禄の優なるを慙ず」、官僚の世界に身を置きながら、第29・30句「洛下 新隠を招き、秦中 旧遊を忘る」（洛陽で新しい退職者を招き、むかし長安で交際した現役の役人たちは忘れ去る）、また第39・40句「応に須らく心と共に語り、万事一時に休すべし」、気分は隠者であった。

『宋史』『道学一・邵雍伝』などの記述を見ると、邵雍ははじめ、衛州の共城（河南省輝県、洛陽からおお

よそ北東に向かつて黄河を越えて百五十キロに住んでいた。学問をする年齢に達すると、当時の慣わしとして科擧受験の勉強に日夜いそしんでいたが、「昔の人は古人を友とした」と慨嘆して、古代の斉・魯・宋・鄭などの遺蹟を尋ねて旅をして回った。やがて突如として共城の我が家に戻つて来ると、「道はここに在り」と言つて、再び外に出ることはなかった。「道はここに在り」は、『孟子』『離婁上篇』の「道は邇ちかきに在り」を徹底させた表現である。この間、共城の県知事代理をしていた李之才に知遇を得て、かれから河図・洛書・宓義八卦六十四卦図象など、神秘のベールにつつまれた古代哲学に関する学問を教えられ、その修得に励んでいた。「史を閲して興亡を悟り、経を探りて根源を得たり」（三城の太守韓子華舍人に寄せて謝す）卷二、人類の興亡史と宇宙の根源、一言でいえば道の探求、これが邵雍の目指した学問の目的であつた。その後、仁宗の皇祐元年（一〇四九）、三十九歳のとき、門生たちの斡旋によつて洛陽の履道坊に卜築することになった。その経緯について、息子の邵伯温の『聞見録』（卷十八）に次のように記されている。

康節先公 慶曆（一〇四一―一〇四八）の間、洛（水）に過よぎり、水北の湯氏に館ぐんる。其の山水風俗の美を愛し、始めて卜築の意有り。皇祐元年に至り、衛州の共城自り、大父伊川丈人（邵雍の父親・邵古）を奉じてここに遷り居る。門生の懷州武陟、知県侯の紹曾字は孝傑、其の行を助く。初め天宮寺（洛陽の西北、尚善里にあつた）の三学院に学まなぶ。劉諫議元瑜字は君玉（以下、十数名の人名が記されているが、省略する）は交遊最も密にして、或は門生と称す。洛の人 為に宅を履道坊の西 天慶觀の東に買う。

邵雍の「新居成り、劉君玉殿院に呈す」（卷二）と題する詩が、このおりに作られた作品であつて、次のように詠まれている。

履道坊南竹徑脩 履道坊の南 竹徑脩なぐさし

綠楊陰裏水分流 綠楊の陰裏 水は分流す

衆賢買得澄心景

衆賢は買い得たり 澄心の景

獨我居爲養志秋

独り我れは居りて爲す 養志の秋

若比陳門成已僭

もし陳門に比すれば 已に僭と成り

苟陪顏巷亦堪憂

苟くも顏巷に陪すれば 亦た憂うるに堪えたり

無端風雨雖狂暴

無端の風雨 狂暴なりと雖も

不信能凌沈隱侯

信ぜず 能く沈隱侯を凌がんことを

第5句の「陳門」は、わずかに膝を容れるほどの空間に極貧の生活に甘んじていた戦国時代の隱者・陳仲子の家の門（皇甫謐『高士伝』卷中）、第6句の「顏巷」は、貧窮の生活の中で、道を楽しんで憂えに堪えずということのなかつた孔子の高弟・顏淵の住んでいた巷である（『論語』「雍也」篇）。己れの住居は、陳仲子や顏淵の住居より立派である、邵雍はいうのである。最後の一句の「沈隱侯」は、梁の沈約（四四一―五二三）。建昌県侯に封ぜられ、死後に隱と諡されたので沈隱侯と称す。早く梁の元帝蕭繹（五〇七―五五四）の『金樓子』や顏之推（五三〇―五九一？）の『顏氏家訓』「文章」篇に沈隱侯と記され、唐代の詩人たちも、しばしば襲用して沈隱侯と称している。邵詩の「無端の風雨狂暴なりと雖も、信ぜず 能く沈隱侯を凌がんことを」であるが、『梁書』「沈約伝」に「時に隆重に遇うと雖も、而れども居處は儉素なり」と記されていること、この一文に引き続いて引用される沈約の「郊居の賦」の中で、「既に從に堅て横に構え、亦た風は除き雨は攘う」、「霜姿（霜を受けたオギ）を編み、寒茅を葺く」などと記述されていることなどから、邵雍は沈約の住居を、とりあえず風雨にたえられる程度のつましいものであったと理解し、そのような沈隱侯その人とその住居をおのれ自身とおのれの「新居」に比擬したのである。

ところで資料が『全唐詩』にかざられるが、唐代では沈隱侯は、東陽（浙江省金華市）の太守であったときに玄暢樓に題した絶唱「八詠」詩の作者とイメージされていて、沈隱侯と儉素な住居という結合や連想は、まったくない。

また沈隱侯を作者にはつきりと比擬して表現する例もない。一例をあげれば、劉禹錫「東陽は本と是れ佳き山水、何ぞ況んや曾て沈隱侯を経るをや」(「東陽于令の寒碧園詩に答う」『全唐詩』卷三六一)。また唐詩には「沈侯」という言葉もあるが、右に述べた沈隱侯のイメージに、さらに作詩における回避すべき八種類の欠点(病)、いわゆる「八病説」の主唱者というファクターが加えられる。「当年 潘子の貌、避病 沈侯の詩」(秦系「烏程楊奉明府に贈る」『全唐詩』卷二六〇)。「潘子」は美貌の持ち主・潘岳(二四八―三〇〇)である。右に述べた事實は、「信ぜず 能く沈隱侯を凌がんことを」一句を考えるうえで重要である。もう一度確認しておくと、唐人は沈隱侯を東陽の太守、「八詠」詩を詠んだ著名な詩人という約束のもとに沈隱侯を詠んだ。そして何よりも唐人が沈隱侯と表現するとき、おそらく生前には侯爵の爵位を与えられ、死後には隱という諡を与えられて現世での名声をほしきままにした人物、いわば功成り名を遂げ身退くという立志伝中の人という暗黙の了解があった。これは、自分たちと沈隱侯沈約との間には、ある越えがたい一線があると、唐人は意識していたことを意味する。それに対して、邵雍は沈隱侯を「居処儉素」である人物としておのれに比擬し、邵雍とおなじ次元にまで引き下げて沈隱侯と表現した。「隱侯」という称号が本来もっていた特殊なイメージは捨象され、邵雍にとって沈隱侯は、陳仲子や顔淵と同じように、おのれを表現するための単なる詩的素材に過ぎなくなっているのである。宋詩からもう一例あげておこう。邵雍より四歳年長の歐陽修(一〇七二―一〇七二)の「即目」(『歐陽文忠公文集』卷五十五)と題する詩である。

李徑陰森接翠疇

李徑 陰森として 翠疇に接す

押簾風日澹清秋

簾を押す風日 清秋澹し

晚鳥藏柳棲殘照

晚鳥 柳に藏れ 殘照に棲み

遠燕傷風失故樓

遠燕 風に傷み 故樓を失す

星漢經年雖可望

星漢 經年 望む可しと雖も

雲波千疊不緘愁 雲波 千疊 緘愁せず

平居革帶頻移孔 平居 革帶 頻りに孔^{あな}を移す

誰問無慘沈隱侯 誰か問わん 無慘^{むらん}の沈隱侯

この詩は、おそらく天聖五年（一〇二七）、歐陽修が都の下京で行われた科挙試験に落第し、失意の中、故郷に帰る

道中に詠まれた作品と思われる。劉德清著 郭預衡審訂『歐陽修傳』（哈爾濱 一九九五年）一二頁参照。問題は最後

の一聯、「平居 革帶 頻りに孔^{あな}を移すも、誰か問わん 無慘^{むらん}の沈隱侯」である。「革帶」の句は、沈約が三公の地位

を願って、武帝に許されなかったとき、自分の心情を綴って徐勉に与えた手紙の一文「革帶は常に応に孔を移すべ

し」（『梁書』「沈約伝」）をふまえる。歐陽修は「無慘」という言葉で自分を沈隱侯にたとえたのである。拙文の第八節

「閑適と儉適」において述べるのとおり、邵雍は歐陽修の作品に親しんでいた形跡がある。したがっておのれを比擬し

て沈隱侯という表現は、歐陽修の詩からヒントを得たのではないかと思われるが、邵雍にしても歐陽修にしても、唐

詩を取りあげなかった沈隱侯の一面に光をあてて、新しいイメージを創出したといえるのではないか。なお、白居易

の詩文には、「樓に登りて詩は八詠、硯を置いて賦は三都」（『微之が春日簡を陽明洞天に投ずるに和す五十韻』卷五十六）

のように、元稹の文学的才能を「詩は八詠」と表現した詩句はあるが、沈隱侯など沈約の名を使用した作品はないよ

うだ。

沈隱侯をめぐって紙数を割きすぎた。本論にもどうう。邵雍が「新居成り、劉君玉殿院に呈す」詩を作るにあたっ

て、白居易の「履道の新居二十韻」詩を意識していたことは、次の三点から判断してほぼ間違いない。

その一、拙文の冒頭に引用した司馬光の「独樂園七題・澆花亭」詩に、「身を退きて履道に家す」と詠まれていた

ように、邵雍にとっても白居易の住居といえは履道坊という連想が自然に働いていたこと。

その二、邵詩の出だしの第1句「履道坊の南 竹徑脩し」が、白詩の出だしの第1句「履道坊の西角」ときわめて

似た表現であること。

その三、白詩の第8句「碧を鋪いて 水は平かに流る」の「水は平かに流る」と、邵詩の第2句「緑楊の陰裏 水は分流す」の「水は分流す」と類似していること。

しかも邵雍の白居易の詩に対する知識は、たんに「履道の新居二十韻」詩一首にかぎられない。たとえば邵詩冒頭の二句にかぎって見ても、「竹径」は、白居易「新居に題して宣州の崔相公に寄す」詩（卷五十三）に「竹径を疏通して将に月を迎えんとし、莎台を掃掠して春を待たんと欲す」と詠まれている「竹径」を、「緑楊の陰裏」は、白居易「錢塘湖の春行」詩（卷二十）に「最も湖東を愛し 行けども足らず、緑楊の陰裏 白沙堤」と詠まれている「緑楊の陰裏」を、それぞれ襲用したと思われる。「新居に題して」云々の「新居」は履道のそれ。もつとも、「緑楊の陰裏」については、『全唐詩』の中では白居易以外にも、温庭筠（八二一―八七二）と徐鉉（九一七―九九二）の詩にそれぞれ一例ずつ、「緑楊の陰裏 千家の月、紅藕の香中 万点の珠」（盧生に寄す）『全唐詩』卷五八二、「老大にして春に逢い 総て春を恨む、緑楊の陰裏 最も人を愁えしむ」（柳枝詞十二首・その五）『全唐詩』卷七五二と詠まれており、邵詩には別に「緑楊の陰裏 芳を尋ねて遍く、紅杏の香中 酔いを帯びて帰る」（春遊五首・その三）卷二二という詩句もあって、温庭筠の「緑楊の陰裏 千家の月、紅藕の香中 万点の珠」の影響を受けているかもしれない。しかし、いずれ拙文において明らかにになるとおり、邵雍は白居易の詩を自家葉籠中の物としていて、詩作の養分のかなり多くを白居易から得ていること（もし白詩と邵詩の間に共通する語彙・表現を集めれば、相当の数に達すると思われる）から判断して、邵雍は白詩の「最も湖東を愛し 行けども足らず、緑楊の陰裏 白沙堤」を愛唱していたと考えるのが妥当であろう。なお、邵詩にはもう一例、「緑楊の陰裏 樽罍を擁し、身は健やか 時は康らか 放懷するに好し」（李少卿に招かれ往くに代わりて吟ず）卷十五と詠われている。邵雍は「緑楊の陰裏」が氣にいつていたようだ。

邵雍は洛陽に卜居する前に、すでに白居易の文学にふかく親しんでいた。これは、北宋の士大夫たちの間に白居易

の文学が、広範に浸透していたことを示すひとつの証拠といっているが、実生活において同じく洛陽の履道坊に閑居するという共有体験が、邵雍に対して白居易をいつそう身近な人間に感じさせた。⁽⁸⁾ いやむしろ邵雍は、洛陽を居住地に決めるにあたって、白居易が送った閑適の生活をつよく意識していたという風にいふべきであろう。実際、邵雍は文字どおり「朝廷に住まず山にも入らず」（白居易「詠懷」卷六十、大都会に身をおく隠者として、閑適の人生、邵雍の表現を引用すれば、「天を楽しむを事業と為し、志を養うは是れ生涯」（「擊壤吟」卷十七）を死ぬまで洛陽において持続することになる。⁽⁹⁾ しかも邵雍の人生は、かれの主観では白居易よりも幸福なものであった。この点については後述する。

二 林下ならびに気味

洛陽に住んでいた邵雍は、おのれの居住空間をしばしば「林下」と呼ぶ。たとえば熙寧五年（一〇七二）、六十二歳のときの作「三城の王宣徽に寄す二首・其の一」（卷八）に

林下居雖陋 林下 居は陋なりと雖も

花前飲却頻 花前 飲は却つて頻りなり

世間無事樂 世間 無事の樂しみ

都恐屬閑人 都て恐らく閑人に属さん

と詠まれている。「林下」は、阮籍（二一〇―二六三）や嵇康（二三三―二六二）など七賢が集った竹林から派生した言葉であって、隠者の生活空間を象徴的に表すものである。このような「林下」は、唐代以前の詩にもみられるが、やはり白居易にヒントを得たと思われる。その理由として、まず白居易の使用例が群を抜いて多いということを指摘す

ることができる。三千首と称される膨大な詩数にもよるのだろうが、私の調査に遺漏がなければ24例ある。ちなみに邵雍も、「林下五吟」(巻八)や「林下吟」(巻十)など24例、すべておのれの居住空間として使用する。次に指摘しなければならぬのは、「林下」の内容である。白居易も俗世間と心理的に隔絶した自分の居住空間を称して「林下」と呼ぶことがある。たとえば開成元年(八三六、六十五歳のときに作った「老來の生計」詩(巻六十六)は、次のとおりである。

老來生計君看取 老來の生計 君よ見て取れ

白日遊行夜醉吟 白日に遊行し 夜に酔吟す

陶令有田唯種黍 陶令 田有り 唯だ黍を種え

鄧家無子不留金 鄧家 子無く 金を留めず

人間榮耀因緣淺 人間の榮耀 因緣淺く

林下幽閑氣味深 林下の幽閑 氣味深し

煩慮漸銷虛白長 煩慮 漸く銷え 虛白長く

一年心勝一年心 一年の心は一年の心に勝る

「人間の榮耀 因緣淺く、林下の幽閑 氣味深し」、「林下」が「人間」(俗世間)と対にして「老來の生計」を送る空間として表現されている。そのほか「静かに掃う 林下の地、閑かに疏す 池畔の泉」(「泉を引く」巻五十二)、「林下 水辺 厭くこと無き日、便ち老いを終うるに堪えたり 豈に年を論ぜんや」(「池上即事」巻五十七)、「但だ恐る 人間に長物と為るを、如かず 林下に遺民と作るに」(巻七十二)など。邵雍は「林下」を、白居易から得たとしていいであろう。ただし、白居易の場合、邵雍がすべておのれの居住空間を指して「林下」と称するのはちがって、たとえば「晋朝は高士を軽んじ、林下に劉伶を棄つ」(「陶潜の体に效う詩十六首・その十三」巻五)のごとく、すべての

「林下」が白居易自身の居住空間を指しているわけではない。

なお、「林下」に似た言葉に「林間」がある。「林間」といえば、白居易の「林間に酒を煖めて紅葉を焼く、石上に詩を題して緑苔を払う」（『和漢朗詠集』）が懐かしく思い出されるが、邵雍に關していえば、たとえば「世上榮都謝、林間樂尚貪」（世上 榮え都て謝し、林間 樂しみ尚お貪る）（『酒を把る』卷十）のごとく、平仄の關係で使い分けていると思われる場合もあるが、「川上數峯青、林間一水明」（川上 數峰青く、林間 一水明かなり）（『燕堂即事』卷三）のように、たんに平仄の關係による使い分けであるのみならず、作者の居住空間の範圍を越えた、もっと広い空間を表すときに「林間」が使用されることがある。

ここで白居易「老來の生計」詩の一句「林下の幽閑 氣味深し」の「氣味」について、邵雍との關係で補足しておきたい。この「氣味」も白居易、邵雍ともに好んで使う言葉である。邵雍に「閑中吟三首」（卷十七）と題する五言律詩があり、三首とも冒頭に「閑中の氣味」という表現が用いられている。

閑中氣味長 閑中の氣味長し

長處是仙鄉 長き処は是れ仙郷

閑中氣味真 閑中の氣味真なり

真處是天民 真なる処は是れ天民

閑中氣味全 閑中の氣味全し

全處是天仙 全き処は是れ天仙

右の詩が三首連作であるのは、おそらく道教にいう「三清」（玉清・上清・太清）を意識してのことでないかと考え

られる。「仙郷」、「天民」、「天仙」をあえて訳せば、それぞれ仙人の住む世界、「仙郷」の人、もっともすぐれた「仙郷」の人のような意味になるが、「長」、「真」、「全」、この三者の間に価値の序列はなく、三者は一体となって邵雍の理想とする観念的世界を構成している。また「仙」と表現されてはいるけれども、これは邵雍独特の言い回しであって、要するにこの地上の世界において道を体得した人の謂いである。もちろん邵雍をさす。白居易の詩には「仙郷」と「天民」の語はなく、「天仙」はあるけれども、たとえば「瀛洲に上らんと欲して別れに臨む時、君に十首の歩虚詞を贈る。天仙 若し愛して応に問うべくんば、向って道え 江州司馬の詩と」（「蕭練師を送る歩虚詞十首の巻後、二絶を以てて之に繼ぐ・その二」卷十七）のごとく、白居易自身のこととしては詠まれていない。これは、白居易と邵雍の人生における目的や関心の違いを際立たせるものであるが、白居易がやはり「氣味」を数多く好んで使っていること（35例、邵雍は8例）、また白居易の「林下の幽閑 氣味深し」の一句には、表現的に邵雍の「閑中の氣味長し」、「閑中の氣味真なり」、「閑中の氣味全し」に通じるものがあることなどから判断して、邵雍は「閑中吟」において白居易の言葉を借用しながら、しかも白居易の詩とおよそ趣の異なった詩的世界を創りあげた。ここに「閑中吟」のその三を紹介しておこう（その二は、拙論「邵雍と芳草」に引用した。拙著『夕日と芳草』一八七頁）。

閑中氣味全 閑中の氣味全し

全處是天仙 全き處は是れ天仙

富有林泉樂 富には林泉の楽しみ有り

清無市井喧 清には市井の喧しき無し

爛觀千聖奧 爛觀す 千聖の奥

醉擁萬花妍 醉擁す 万花の妍

莫作傷心事 傷心の事を作す莫れ

傷心事好旋 傷心は 事旋るを好む

最後の一句「傷心は 事旋るを好む」は、『老子』（三十章）の一節「道を以って人主を佐くる者は、兵を以って天下に強くせず。其の事還るを好む」にもとづく。蘇轍『老子解』は、次のように解釈した。「聖人の兵を用いるは、皆な已むを得ざるに出で、而して強きを以って天下に勝たんと欲す。或は能く勝つと雖も、其の禍 必ず之に還報す」。「還報」つまり報いを受けるという意味である。邵詩の「旋」は『老子』の「還」とおなじであり、邵雍は「事好旋」を『老子解』とおなじ意味で使用した。「傷心の事を作す」と、禍がはねかえってくる。これは単に日常次元のはなしでなく、政治・社会問題をふくんだはなしであろう。邵雍はよく知られているとおり、反改革派・旧法党の領袖である司馬光ときわめて親しい仲であり、司馬光から堯夫先生と呼ばれた人物である。

さらに、この節の冒頭に引用した邵雍の「三城の王宣徽に寄す」詩について、なお白居易との関係で注意しておくなければならないことが二点ある。

その一、小さい問題であるが、『花前の飲』。白居易の「薛秀才が梅花を尋ねて同じく飲み贈られしに和す」詩（巻二十）に「忽ち驚く 林下 寒梅を發くに、便ち試みる 花前 冷杯を飲むを」と詠まれているように、「林下」における「花前」の「飲」は、白居易が先例として意識されている。

その二、「都て恐らく閑人に属さん」の「閑人」（閑人とも表記されるが、閑人で統一する）。この言葉は、白居易に27例、邵雍に15例ある。ここには具体例は省略するが、邵雍はやはり白居易を先例として「閑人」を使用した。たんに数量からいっても、「閑人」は、ふたりを考える上ではなほ重要な詩語である。節を改めて取りあげることにする。

三 閑 人

白居易は、大和三年（八二九）五十八歳、太子賓客分司の職にあつたとき、「黄醕の新酎を嘗めて微之を憶う」（卷五十八）と題する詩を作り、冒頭の一聯において

世間好物黄醕酒 世間の好物 黄醕の酒

天下閑人白侍郎 天下の閑人 白侍郎

と声高に呼ばわつたが（白侍郎と称したのは、前年に刑部侍郎に除せられていたからである）、邵雍が白居易の詩に触発されて、「閑人」なる詩語を駆使したことは、次に引用する白居易のふたつの詩句が典型的に示している。

報恩寺に題す（卷五十四）

晚晴宜野寺 晚晴 野寺に宜しく

秋景屬閑人 秋景 閑人に属す

春尽くる日、天津橋に醉吟し、偶たま李尹侍郎（李紳、河南の長官であつた）に呈す（卷六十六）

三川徒有主 三川（洛陽を指す） 徒らに主有り

風景屬閑人 風景 閑人に属す

このふたつの詩句に表現されている「屬閑人」（閑人に属す）である。後述するとおり、白居易の「閑人」と邵雍の「閑人」の間には、「閑人」が生まれる経緯や機縁にちがいがあつて、微妙な差異があるけれども、邵雍の「三城の王宣徽に寄す」詩における「屬閑人」は、右の白居易の詩句における「屬閑人」という表現を踏襲したと考えてよい。その理由は、ふたつある。まず右の白居易の「屬閑人」と邵雍の「屬閑人」とは、意味的にはほぼ同じ性質のもの、つ

まり「閑人」は作者自身を指し、「閑」は「閑適」に傾くニュアンスをふくんでいること。次に「閑人に属す」という言い回しは、白居易以前の詩にはあまり見られないようであり、そのうえ白居易（七七二―八四六）と同時の劉禹錫（七七二―八四二）に「借問す 池台の主、多くは要路の津に居る。千金もて絶境を買い、永日 閑人に属す」（『城東の閑遊』『劉賓客集』卷二十二）という句が一例あるが、劉禹錫のいう「閑人」は、「千金もて絶境を買」った「要路の津に居る」「池台の主」であって、作者・劉禹錫を指すのではなく、批判的なニュアンスをふくんだ第三者を指すこと。ちなみに『劉禹錫詩文選注 湖南省劉禹錫詩文選注組』（湖南人民出版社 一九七八年）は、この「閑人」を「指过着寄生生活的权貴」（寄生的な生活をしている権勢家を指す）と注する。邵雍は、「属閑人」という表現にかぎらず、「閑人」という言葉が30例近くもある白居易の詩群に触発されて、「閑人」を使用したのである。

ところで白詩における「閑人」は、終始一貫して同じニュアンスをもって使用されているのではない、それに対して邵雍の場合は、もっぱら「閑適の人」という意味で使用されている、ということは注意しておかなければならない。とくに白居易の場合、自己を称して「閑人」というとき、この「閑人」なる語は、その時々におかれた状況に応じて変化している彼の心境を如実に反映していて、緻密に跡を追って分析すると面白いであろうが、今はただ白居易の「閑人」がたどった跡について、重要な節目に着目しながら機械的にごく大まかに素描しておくにとどめる。

白居易がはじめて「閑人」を使用したのは、元和六年（八一二）から元和九年（八一四）の間、白居易が四十歳から四十三歳にかけてのとき、長安にいて作ったとされる「唐衢を傷む二首・その二」（卷二）の次の一聯においてである。

貴人皆怪怒

貴人は皆な怪怒し

閑人亦非皆

閑人は亦た非皆す

前句の「貴人は皆な怪怒し」から判断して、「閑人は亦た非皆す」における「閑人」は、先ほどの劉禹錫詩の「閑

人」と同じ範疇、すなわち批判的なニュアンスをふくんだ第三者を指すものである。劉禹錫詩の制作年次は、蔣崧等『劉禹錫詩集編年箋注』（山東大学出版社 一九九七年）によれば、大和八年（八二七）。劉禹錫はおそらく、白居易の右の「閑人」を踏襲したと思われる。なお、白居易の右の詩は、『白氏長慶集』の分類のうち「諷諭」に属する作品であることを指摘しておこう。

ところが白居易が官界において不本意な体験を積み重ねるにつれて、「閑人」に複雑なニュアンスがふくまれてくる。元和十三年（八一八）四十七歳、江州司馬に左遷されていたときの作「早蟬」詩（卷十）は、次のような作品である。

月出先照山 月出でて 先ず山を照らし

風生先動水 風生じて 先ず水を動かす

亦如早蟬聲 亦た早蟬の声の如き

先入閑人耳 先ず閑人の耳に入る

一聞愁意結 一たび聞きて 愁意結ばれ

再聽鄉心起 再び聽いて 郷心起こる

渭上新蟬聲 渭上 新蟬の聲

先聽渾相似 先ず聽くもの 渾て相似たり

衡門有誰聽 衡門 誰れ有りて聽く

日暮槐花裏 日暮 槐花の裏

月が真つ先に山を照らし、風が真つ先に水を動かすように、季節の変化をいち早く感じとる早秋の蟬の鳴き声は、真つ先に「閑人」の耳に入るという「閑人」は、先ほどの詩と違って、作者みずからを指している。しかし、「一た

び聞きて 愁意結ばれ、再び聴いて 郷心起ころ」と続いて詠われているように、この詩における「閑人」には、感傷的な響きを感じられる。この「閑人」は閑適の人というよりも、閑暇の無用な人というニュアンスであって、この詩が「感傷」の分類に収録されているゆえんである。

さらにこの節の冒頭に引用した「報恩寺に題す」詩（宝暦二年 八二六、五十五歳、蘇州刺史のときの作）になると、

好是清涼地 好是是れ清涼の地

都無繫絆身 都て身を繫絆する無し

晚晴宜野寺 晩晴 野寺に宜しく

秋景屬閑人 秋景 閑人に属す

淨石堪敷坐 淨石は坐を敷くに堪え

寒泉可濯巾 寒泉は巾を濯う可し

自慙容髮上 自ずから慙ず 容鬢の上

猶帶郡庭塵 猶お郡庭の塵を帯ぶるを

「好し是れ清涼の地、都て身を繫絆する無し」（清涼にふさわしい地、わが身にまわりつくものはまったくない）に続く「晚晴 野寺に宜しく、秋景 閑人に属す」一聯の「閑人」には、「愁意」の影がひとかけらもないとは言いがたいにしても、また「自ずから慙ず 容鬢の上、猶お郡庭の塵を帯ぶるを」と官僚の身であることに恥じらいを感じながらも、「閑人」であることを受け入れて、「淨石」が点在し、「寒泉」に水をたたえる、「清涼」の自然を存分に享受できる「閑人」としての喜びに浸ろうとする積極的な姿勢が見て取れる。

その後、大和三年（八二九）五十八歳のときに叫んだ「天下の閑人 白侍郎」を経て、大和九年（八三五）、六十四

歳のととき、まるで「閑人」に居直っているのか、それともあらゆる思念を止揚した後の諦念でもあるのか、「月俸は百千 官は二品 朝廷 我れを雇いて 閑人と作す」(同州刺史従り改めて太子少傅分司を授けらる「卷六十」)と詠う詩もあるが、「報恩寺に題す」詩における「閑人」は、白居易がたどりついた「一応の到達点」といってよい。

邵雍の場合は、白居易が「閑人」であることに肯定的な意味を見出し、それを積極的に受け入れ享受するという到達点から出発した。しかも始めから終りまで、悲哀の色に染まることがない。前節に「世間 無事の楽しみ、都て恐らく閑人に属さん」を引用したが、もう二例、嘉祐五年(一〇六〇)、五十歳のとき、はじめて「閑人」を使用した作品「秋遊六首・その三」(卷二)と、熙寧十年(一〇七七)、六十七歳、最後に「閑人」を詠んだ作品「洛陽春吟・その一」を紹介しよう。まず「秋遊六首・その三」。

八月光陰未甚凄 八月 光陰 未だ甚しくは凄ならず

松亭竹樹尤爲宜 松亭 竹樹 尤も宜しきと爲す

況當晝夜初停處 況んや晝夜 初めて停まる処に当たり

正是炎涼得所時 正に是れ炎涼 所を得たる時なるをや

明月入懷如有意 明月 懷に入る 意有るが如く

好風迎面似相知 好風 面を迎う 相知るに似たり

閑人歌詠自怡悅 閑人 歌詠して 自のずから怡悦し

不管朝廷不採詩 管せず 朝廷の詩を採らざるを

第3句の「晝夜 初めて停まる処」は、一年のうち昼と夜の時間の長さが同じ時の意。第4句の「正に是れ炎涼所を得たる時」は、暑くもなく寒くもない、ちょうどよい時節。「温涼の氣候 二八月、道義の賓朋 三五人」、「閑適吟・其の二」(卷六)の一聯である。邵雍は春とともに秋の晴れあがった好時節をことのほか愛した。おのれに心

を寄せるかのように「懐に入る明月」、あたかも旧知でもあるかのとき「面を迎える好風」、まさに「閑人 歌詠して 自のずから怡悦」するにふさわしい外的状況、おのれがうたう喜びの歌を、古代の習慣に従って「朝廷が採」るようなことをしなくても、そんなことはおかまいなし。この詩には隠者としての「閑人」の歓喜が、一点の曇りもなく、おおらかに詠いあげられている。少なくとも白居易がたどった「閑人」の歩みの中に、どうしても愁いの陰影を見てしまうことを思うとき、その感を一層つよくする。

なお、右の詩が古代の習俗である「採詩」に言い及んだのは、白居易の「新樂府」五十首の最後の作「采詩の官」（卷四）が意識にあるであろう。白居易は「采詩の官」の最後を、次のように詠って結んだ。「君よ君よ 願わくは此れを聴け、壅弊を開きて人情に達せんと欲すれば、先ず歌詩に向かつて諷刺を求めよ」。これに対して邵雍は、「閑人 歌詠して 自のずから怡悦し、管せず 朝廷の詩を採らざるを」と詠って結んだ。「歌詠して 自のずから怡悦し」には、邵雍の白居易に対するある種の皮肉っぽい批判の口吻が感じられる。拙者邵雍の「歌詩に向かつて諷刺を求め」る必要など、さらさらござりませぬ。

次に「洛陽春吟・その一」。

四方景好無如洛	四方	景好きこと	洛に如くは無く
一歳花奇莫若春	一歳	花奇しきこと	春に若くは莫し
景好花奇精妙處	景好く	花奇しき	精妙の処
又能分付與閑人	又能く分付して		閑人に与う

この詩を解説するキーワードは、「精妙の処」である。白居易の詩文に「精妙」なる語はない。それに対して邵雍は「洛陽春吟」以外にも、「安樂窩中吟・その十二」（卷十 熙寧七年 六十四歳）および「牡丹吟」（卷十九 熙寧十年 六十七歳）の一聯において、それぞれ次のように詠んでいる。「造化の功夫 精妙の処、都て宜しく分付して閑人に与

うべし。」「真宰の功夫 精妙の処、人意の思量す可きを容るるに非ず。」「造化の功夫」といい、「真宰の功夫」というのは、要するに万物の創造主体である天地自然の、小ざかしい「人意」を超えた、えもいわれぬ靈妙な作用である。この靈妙な作用によって世界に生み出されるさまざまな現象の中でとりわけて卓越したもの、それが「精妙の処」であつて、この「精妙の処」、たとえば「好景」や「奇花」(邵雍は牡丹の花をこよなく愛した)などが、「閑人」であるこのおのれにも分け与えられているというのである。この哲学詩のような「洛陽春吟」も、「閑人」の底なしの歡喜の歌であつて、悲哀とはまったく無縁である。

「精妙」とおなじく「造化の功夫」や「真宰の功夫」という表現も、白居易の詩文には見られない邵雍独自の哲学にもとづく表現であるが、しかしながら、「閑人」の源を尋ねれば、結局のところやはり白居易に行き着くのは否定できない。

四 快活の人

南宋の劉克莊(一一八七―一二六九)がかつて、「長纓（ぎょう） 光中 忙しく雪を颯（さ）き、小車 遍く春を尋ぬ。吾れは評す子美 饑寒の態、堯夫 快活の身に似かずと」(「書事十首・その二」『後村先生大全集』卷三十一)のごとく、邵雍を称して「快活の身」といったことがある。子美は杜甫の字、堯夫は邵雍の字である。洛陽で喜びの歌をうたっていた邵雍は、「閑人」ほどは目立たないが、「快活の人」とおのれを呼ぶことがある。熙寧八年(一〇七五)、六十五歳のとき、「安樂吟」詩(卷十四)を作り、次のように詠んだ(やや長編の作品なので番号を付けた)。

1 安樂先生 安樂先生

2 不顯姓氏 姓氏 顕かならず

21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
或戴接籬	大筆快志	小車賞心	瓮牖薦睡	盆池資吟	歸之肝肺	收天下春	飲不至醉	窘未嘗憂	無拘無忌	無將無迎	無富無貴	無賤無貧	翔而後至	色斯其舉	江湖性氣	風月情懷	居洛之湫	垂三十年
或は接籬を戴き	大筆 快志	小車 賞心	瓮牖 睡りを薦む	盆池 吟を資け	之を肝肺に帰す	天下の春を収め	飲みて酔いに至らず	窘しみて未だ嘗て憂えず	拘むこと無く忌むこと無し	將ること無く迎うること無く	富むこと無く貴きこと無し	賤しきこと無く貧しきこと無く	翔りて而して後に至る	色みて斯に其れ挙がり	江湖の性氣	風月の情懷	洛の湫に居る	三十年に垂んとして

22	或着半臂	或は半臂を着す
23	或坐林間	或は林間に坐し
24	或行水際	或は水際を行く
25	樂見善人	善人を見るを樂しみ
26	樂聞善事	善事を聞くを樂しむ
27	樂道善言	善言を道 ^い うを樂しみ
28	樂行善意	善意を行 ^な うを樂しむ
29	聞人之惡	人の惡を聞けば
30	若負芒刺	芒刺を負 ^お うが若し
31	聞人之善	人の善を聞けば
32	如佩蘭蕙	蘭蕙を佩 ^ま ぶるが如し
33	不佞禪伯	禪伯に佞 ^{めい} らず
34	不諛方士	方士に諛 ^{へつ} わす
35	不出戶庭	戶庭を出でずして
36	直際天地	直ちに天地と際 ^{まじ} わる
37	三軍莫凌	三軍も凌 ^な ぐ莫く
38	萬鍾莫致	萬鍾も致 ^{いた} す莫し
39	爲快活人	快活 ^な の人爲りて
40	六十五歲	六十五歲

この「安樂先生、姓氏 顯かならず」で始まる「安樂吟」は、「安樂吟」と題名されているが、「安樂先生吟」と改題しても、内容的にはまったく齟齬をきたさない、四言詩による一種の自伝である。そして上野日出刀氏が指摘される⁽¹¹⁾とおり、陶淵明の「先生は何許^{いず}の人なるかを知らざるなり。亦た其の姓字を詳らかにせず」で始まる「五柳先生伝」をふまえるが、さらに拙文のテーマから言えば、白居易の「醉吟先生なる者は、其の姓字郷里官爵を忘れ、忽忽として吾れの誰為るかを知らざるなり」で始まる「醉吟先生伝」（卷六十二）も、下敷きにしていると考えてよい。

「安樂吟」の第3・4句「三十年に垂んとして、洛の涘に居る」は、「醉吟先生伝」の「宦遊すること三十載、將に老いんとして洛下に退居す」というくだりのアナロジーである。しかし、「安樂吟」と「醉吟先生伝」との関係について、ここではこれ以上とくに取りあげて論じることはいらない。また第2句の「不顯姓氏」を「姓氏を顯さず」と読んで、作者の意志的な行為と解釈するのか、「姓氏 顯かならず」と読んで、第三者的な視点で表現されていると解釈するのか、検討を要するが、「安樂吟」が「五柳先生伝」や「醉吟先生伝」を踏襲しているならば、「姓氏 顯かならず」と読んだほうがいいように思われると指摘するにとどめて、やはりこれ以上は追及しない。拙文の関心は、微細ではあるがやはり詩語の問題であって、最後の一聯「快活の人為りて、六十五歳」の「快活」である。

「快活」は、李百葉撰『北齊書』卷五十「和士開伝」に「一日の快活 千年の国事に敵す」とあって、白居易の造語ではない。しかし、唐代の詩の中では、白居易の詩に詩題をふくめて9例あり、ほかは寒山の詩に4例あるのがやや目につく⁽¹²⁾が、白居易が圧倒的に多い。しかも白居易は大和六年（八三三）、六十一歳のとき、「快活」（卷五十六）と題する詩を作っている。劉克莊は杜甫の「饑寒の態」と対比して、邵雍の「快活の身」をよしと評価したが、もとを質せば「快活」は、白居易によって詩における言葉として生命を吹き込まれたのである。邵雍は「快活」を白居易の詩から得たと考えてよい。白居易の「快活」詩は、次のとおりである。

可惜鶯啼花落處

惜しむ可し 鶯啼いて花落つる處

一壺濁酒送殘春

一壺の濁酒 殘春を送る

可憐月好風涼夜

憐れむ可し 月好く風涼しき夜

一部清商伴老身

一部の清商 老身に伴う

飽食安眠消日月

飽食安眠して 日月を消し

閑談冷笑接交親

閑談冷笑して 交親に接す

誰知將相王侯外

誰れか知らん 將相王侯の外

別有優游快活人

別に優游快活の人あるを

「鶯啼いて花落つる」「殘春」を「濁酒」を飲みながら送り、「月好く風涼しき夜」に「清商」の曲を聴きながら

「老身」をなくさめ、「飽食と安眠」、「閑談と冷笑」（知己との語らいと自分の心を理解しないものに対する冷やかな笑い）に月日を過ごす、「將相王侯」にあらざる「優游」の世界に生きている人、それが「快活の人」である。邵雍は白詩のこのような「快活の人」の描写から刺激を受け、さらに邵雍流に翻案して、「風月の情懷」、「江湖の性氣（性質）」、「飲みて酔いに至らず」、「盆池 吟を資け、瓮牖 睡りを薦む」、「三軍も凌ぐ莫く、万鍾も致す莫し」などと表現したにちがいない。「三軍」の句は、『論語』「子罕」篇の一文「三軍も帥を奪う可きなり。匹夫も志を奪う可からざるなり」のヴァリエーション、「万鍾」の句は、『孟子』「告子上篇」の一文「万鍾は則ち礼儀を弁ぜずして之を受くとも、万鍾 我れに於いて何をか加えん」をふまえる。

右に述べたとおり、邵雍は白居易から「快活の人」を学んだのであるが、白居易の「快活の人」と比較して、邵雍の「快活の人」の特徴は、何であらうか。「安樂吟」詩に特徴的なことは、儒家や道家の古典の中から、単に言葉のみならず、一節がほとんどそのままの形で使用されているところがあることだ。たとえば

(1) 第7・8句「色みて斯に其れ挙がり、翔りて而して後に至る」は、『論語』「郷党」篇の文「色みて斯に挙がり

矣、翔りて而して後に集まる」をほとんどそのまま用いた（おそらく押韻の関係で「集」の意味に近い「至」を使った）。

(2) 第11句「將ること無く迎うること無く」は、『莊子』「応帝王」篇の文「至人の心を用いるは鏡の若し。將らず迎えず、応じて藏せず」にもとづく。邵詩は「不」を「無」にかえた。

(3) 第35句「戸庭を出でず」は、『周易』「節の初九」および「繫辭上伝」の「戸庭を出でず。咎なし」をそのまま使った（第36句は『淮南子』「原道訓」の「一之理施四海、一之解際天地」を襲用したか）。

この三項目は、それぞれいかなる意味を表すのであろうか。(1)については、『論語』古注に「顔色の不善を見れば、則ち之を去る」、「迴翔審観して而る後に下り止まる」とあることから判断して、慎重な処世態度を述べた。(2)については、郭象『莊子注』に「来たらば即ち応じ、去れば即ち止む」とある。臨機応変、一事に固執しない態度を述べた。(3)については王弼の注に「……通塞に明らかにして、險偽を慮り、戸庭を出でずして、慎密失せず、然る後に事済りて咎なし」とあり、『繫辭上伝』には、本文に続いて孔子の見解「乱の生ずる所は、則ち言語を以て階と為す。君密ならざれば則ち臣を失い、臣密ならざれば則ち身を失い、幾事密ならざれば則ち害成る。是を以て君子は慎密にして出ださざるなり」が記されている。孔子は口舌の慎重さを説いた。「戸庭を出でず」は一言でいえば、「慎密」ということである。

要するに「快活の人」とは、何よりもまず儒家や道家の教えにしたがって、臨機応変に対処する術を心得て、しかも慎重な処世を身につけた人である、ということになる。そしてこの処世を徹底すれば、政界や官界などの俗世間からの逃避、つまり隠者の世界に行き着くことになる。これがそのまま白居易に見られない邵雍の「快活の人」の特徴であるといつてよい。なお、第16句「之を肝肺に帰す」の「肝肺」は、ふつうの詩にはあまり使われない言葉であるが、『礼記』「大学」篇の「小人閑居して不善を為し、至らざる所無し。君子を見て而して後に厭然として、其の不善

を捨てて其の善を著す。人の己れを視ること、其の肺肝を見るが如く然れば、則ち何の益あらん。此れを中に誠なれば外に形わると謂う。故に君子は必ず其の独りを慎む」をおそらく意識している。押韻の関係で「肺肝」を「肝肺」と逆においた。「肝肺」の句も、やはり背後に「独りを慎む」という思想が隠れて存在するのである。

「安楽吟」に示される「快活の人」の特徴は、慎重な処世を身につけた人であったが、「安楽吟」は形式的には四言詩である。白居易には完全な形の四言詩は一首もないようだが、邵雍は百四十首近くの四言詩を作っている。「安楽吟」の第17・18・19・20句に「盆池吟を資け、瓮牖睡りを薦む。小車賞心、大筆快志」と詠われていたが、「盆池吟」、「瓮牖吟」、「小車吟」、「大筆吟」と題する四言詩が、「安楽吟」に続いて収録されているほどである。数量からいって、右の事実は看過できない。しかし、拙文のテーマが邵雍の詩に現れた白居易であること、また今のところ邵詩の四言詩について総体的に論じる能力的時間的余裕がないことなどから、ここでは「安楽吟」が四言詩であることの意味について、簡単に卑見を述べておきたい。

四言詩といえは、『詩経』がすぐに思い浮かぶが、邵雍の四言詩は、

人之所學 人の学ぶ所

本學人事 本と人事を学ぶ

人事不脩 人事 脩めざれば

無學何異 学ぶこと無きに何ぞ異ならん

〔所学吟〕卷十三

のごとく、アフォリズムのような作品が多い。「人事を学ぶ」は、『論語』「憲問」篇の孔子の言葉「下学して上達す」に対する孔安国の注釈「下 人事を学んで、上 天命に達す」にもとづく。ところで邵雍に「自作真賛」（卷十二）と題する四言の作品が、一首にすぎないけれども、残っていることは注意すべきである。そもそも「賛」（讃）とは、

形式的には一句四言で構成され、二句ごとに押韻すること、内容的には対象になった人物や事物に対して賛嘆することなどを特徴とする文学ジャンルである（『文心雕龍』『頌讚』参照）が、「自作真贊」は、次のような作品である。

松桂操行 松桂の操行

鶯花文才 鶯花の文才

江山氣度 江山の氣度

風月情懷 風月の情懷

借爾面貌 爾の面貌を借り

假爾形骸 爾の形骸を仮る

弄丸餘暇 丸を弄ぶの余暇

閑往閑來 閑往閑來す

第7句の「丸」は本来、地球儀のような球形のものを指しているが、「丸」に「自注」があつて、「太極を謂う」とある。「太極」とは、いうまでもなく『周易』『繫辭上伝』の「易に太極有り、是れ両儀を生む」の「太極」であるが、右の詩にいう「丸」とは「太極図」を指すのではあるまいか。邵雍の場合、一般的には「先天図」と呼ばれるものであるけれども、明・宋知徳の「太極図」に載せられた「美図歌」に、「我れに一丸有り、黑白相和す。是れ両分すと雖も、還た是れ一箇なり。之を大にすれば載する莫く、之を小にすれば破る莫し。始め無く終わり無く、右無く左無し」と詠われている（常乗義 編者『易経図典精華』（光明日報出版社 二〇〇三年）二七・二八頁所引から転用した）。この「丸」は、詩題の「図」、つまり太極図である。「太極図」といえば、周敦頤（一〇一七～一〇七三）の名がすぐに思い浮かぶが、周氏の「太極図」は、拙論第十章「白居易と邵雍」において述べるように、邵雍の学問の祖師にもあたる陳搏（八七一～九八九）の「古太極図」（俗に「双魚図」と呼ばれる）に由来すると言われる。邵雍と「太極

「図」の關係について、私は浅學にしまつたく知らないが、邵雍も「太極図」を所有していたものではあるまいか。いずれにしても「丸を弄ぶ」とは、宇宙の根本原理を探索するというような意味であろう。第5・6句の「爾」は、「松桂」・「鶯花」・「江山」・「風月」、つまり「太極」を起源として、そこから生じる種々の自然現象をさす。おのれは、これら四種に代表される自然を一身に体得しているというのである（ただし、「自作真贊」の後半四句は、「二程遺書」卷二上（四庫全書本）に引用されているところでは、「問諸天地、天地不對。弄丸餘暇、時往時來」（諸を天地に問うも、天地は對えず。丸を弄ぶの余暇、時往時來す）になつてゐる。「諸を天地に問うも、天地は對えず」とは、自然は人間の理性的認識をこえた現象という意味であらう。ただし、二程がこの詩句を引用した意圖は、別のところにある）。ところでこの作品を一読して、すぐに氣のつくことは、「江山の氣度、風月の情懷」の一聯が「安樂吟」の「風月の情懷、江湖の性氣」とほとんど同じ表現であること、「風月の情懷」にいたつては、まったく同じ表現であることである。したがつて「安樂吟」は、形式的だけではなく、内容的にも「自作真贊」に通じると考えることができる。

次に「真贊」である。「真贊」とは、肖像画に対する贊。すでに述べたとおり、「安樂吟」は一種の自伝である。自伝というのは、別の見方をすれば、自分の肖像を文学的に表現すること、つまり「自作真贊」の変種のようなものである。邵雍は「安樂吟」をおのれに対する贊のような性格をもった作品として詠んだのではないか。「安樂吟」が四言詩であるゆえんである。ちなみに邵雍の自作であるか疑わしいとされているが、かれに「無名君伝」（『宋文鑑』卷一百四十九）と題する自伝がある。この文の中に「自作真贊」の「爾の面貌を借り、爾の形骸を仮る。丸を弄ぶの余暇、閑往閑來す」や、「安樂吟」の「禪伯に倭らず、方士に諛わず。戸庭を出でずして、直ちに天地と際^{まじ}わる」が引用されている。

「安樂吟」が自贊であるからには、おのれを重々しく飾り立てて頌贊する必要がある。そのためのもつとも有効な方法として、權威ある古典の言葉や表現をあえてそのままの形で使用した。「安樂吟」における古典からの借用は、

「安楽吟」が自伝であるとともに、もう一方でこのような意味をも有しているのではないだろうか。古典の言葉を生のまま詩にちりばめることによって、詩としての結晶度が弱められる危険を犯しても、四言詩による自賛としての重みを加えるほうを重視した。

要するに「安楽吟」は、形式的には自伝（自賛）風に仕立てた作品であり、内容的には、川合康三氏『中国の自伝文学』（創文社 一九九六年二月）の分類を適用すれば、「かくありたい我れ」という隠者としての願望であるが、邵雍がおのれは何者であるかということを世間にむかつて表明したのが、白居易を淵源とする「快活の人」であった。

なおここに、（１）「安楽吟」詩について白居易との関連で三点、また（２）白居易「快活」詩の一句「飽食安眠して 日月を消す」について一点、推測を交えながら注意しておきたい。節を改めよう。

五 「安楽吟」と「快活」詩

（１）、「安楽吟」詩について。

その一、「賤しきこと無く貧しきこと無く、富むこと無く貴きこと無し」という表現法。この表現法は、表現法においても、また思想においても、白居易とふかく関わっている。やはり川合康三氏によれば「非A亦非B」というかたちの句は、白居易に特徴的な表現である⁽¹⁴⁾。邵雍の詩からこれと同じパターンの例を引用すると、「年平吟」（巻十二）に

非貴亦非賤 貴きに非ず亦た賤しきに非ず

不飢兼不寒 飢えず兼ねて寒からず

とある。「不飢兼不寒」は、「安楽吟」の「無賤無貧、無富無貴、無將無迎、無拘無忌」とともに、「非A亦非B」の

ヴァリエーションである。白居易の場合、詩語・表現的には、たとえば「松齋自題」詩（卷五）に

非老亦非少 老いたるに非ず亦た少きに非ず

年過三紀餘 年は過ぐ 三紀余り

非賤亦非貴 賤しきに非ず亦た貴きに非ず

朝登一命初 朝に登る 一命の初め

……

昏昏復默默 昏昏復た默默

非智亦非愚 智に非ず亦た愚に非ず

と詠まれている。思想的には白居易の「大隠は朝市に住み、小隠は丘樊に入る。丘樊はただ冷落、朝市はただ囂譁、如かず中隠と作り、隠れて留司の官に在るに。出づるに似て復た処るに似たり、忙しきに非ず亦た閑なるに非ず」、「人生まれて一世に処る、其の道 両つながら全くし難し。賤しくしては即ち凍餒に苦しみ、貴くしては則ち憂患多し。唯だ此の中隠の士、身を致すこと吉にして且つ安し。窮通と豊約と、正に四者の間に在り」といういわゆる「中隠」（卷五十二）であり、「年齢と官位において自分は「老少」「貴賤」の中間にあると、与えられた条件に満足している」⁽¹⁵⁾わけである。

ただ、邵雍は役人ではなかったという点が根本的に違っていて、邵雍が「中隠」を実践した白居易とまったく同じ地平に身を置くことは不可能であった。ところが面白いことに、邵雍はこの役人でないことに、かえって積極的な意味を見出すのである。役人でないおのれは幸いである、白居易を意識しながら、このように主張していると思われる詩が邵雍にあって、邵雍の邵雍たるゆえんは、ここにある。邵雍は熙寧二年（一〇六九）、五十九歳のとき、呂誨（一〇一四～一〇七二）や祖無沢（一〇〇三～一〇八二）たちによって潁州団練推官に推挙されたが、辞退した。そのとき

「詔三たび下たり、郷人に起たざるの意を答う」詩（巻七）を作り、次のように詠んだ。

生平不作皺眉事 生平 眉を皺むる事を作さざれば

天下應無切齒人 天下 応に切齒する人無かるべし

斷送落花安用雨 落花を斷送するに 安んぞ雨を用いん

裝添舊物豈須春 旧物に裝添するに 豈に春を須たんや

幸逢堯舜爲眞主 幸いに堯舜の眞主爲るに逢い

且放巢由作外臣 且くは巢由の外臣と作すに放さん

六十病夫宜揣分 六十の病夫 宜しく分を揣るべく

監司無用苦開陳 監司 苦ろに開陳するを用いる無かれ

第3句は、花は雨が降らなくても自然に散る、第4句は、自然の装いは翌年の春景を待たなくても今年の秋景でよい、という意。おのれをわざわざ採りたてる必要はなく、自然にまかせればうまくゆく、というメタフォア。問題は第2句の「切齒」。白居易を語って「切齒」といえば、白居易「元九に与うる書」（巻四十五）の次の一節が、すぐに思い浮かぶ。

樂遊園にて足下に寄せる詩を聞けば、則ち柄を執る者は扼腕す。紫閣村に宿す詩を聞けば、則ち軍を握る者は切齒す。

「軍を握る者」とは、宦官をさす。宦官の息がかかった「暴卒」の狼藉な振る舞いを諷諭して「紫閣（山北）の村に宿す」詩（巻二）を作った白居易は、宦官の「切齒」にあった。それに対して邵雍は、天下の事件に対して「眉を皺むる事」（眉をひそめるということ）をしないので、おのれに対して「切齒する人」もないであろう、というのである。役人になって官界に入ることを拒絶する意を表明した「詔三たび下たり、郷人に起たざるの意を答う」詩にお

いて、「天下 応に切齒する人無かるべし」と詠じたとき、邵雍は白居易が諷諭詩を作つて受けた打撃、あるいはもつと踏み込んでいえば、かれのその後の一生を規定してしまったとも言ふべき事態を思い浮かべていたのではあるまいか。ちなみに第5句「幸逢堯舜爲眞主」は、白居易「幸逢堯舜無爲日」(「池上の閑吟二首 其二」卷六十四)を、第6句「且放巢由作外臣」は、白居易「堯放巢由作外臣」(「豊樂招提仏光の三寺に遊ぶ」卷六十九)を、ほとんどのそのままの形で襲用した表現である。「詔三たび下だり、郷人に起たざるの意を答う」詩が、白居易を意識していることは、もはや明白である。

たしかに「安楽吟」には白居易のことは、直接的には何も言表されていない。しかし、「詔三たび下だり、郷人に起たざるの意を答う」詩を視野にいれて「安楽吟」を読みなおすとき、邵雍は「安楽吟」において、おのれこそ真に「快活の人」なりと、白居易に対抗するかのごとく、主張しようとしたのではあるまいか。白居易は「田園に帰らんことを想う」(卷五十五)と題する詩において、次のように詠った。

戀他朝市求何事 他^かの朝市を恋いて 何事をか求めん

想取丘園樂此身 丘園を取りて此の身を樂しましめんことを想う

千首惡詩吟過日 千首の惡詩 吟じて日を過ごし

一壺好酒醉銷春 一壺の好酒 酔いて春を銷す

歸郷年亦非金老 郷に帰るも 年亦た全く老いたるに非ず

罷郡家仍未苦貧 郡を罷むれども 家仍お未だ苦だ貧しからず

快活不知如我者 快活 知らず 我れの如き者

人間能有幾多人 人間 能く幾多の人か有る

「快活 知らず 我れの如き者、人間 能く幾多の人か有る」。それに対して「安楽吟」は比喩的にいえば、酔吟先

生・白居易に語りかけているのである。貴殿より「快活」な人間がここにあります。「快活の人為りて、六十五歳」。

その二、「禪伯に倭ねらず、方士に諛わず」。「禪伯」は僧侶、「方士」は仙薬などを練って神仙の修行をしている修験者。邵雍の詩には「禪伯」および「方士」は、「安楽吟」を除いて、一首も現われない。なぜおのれの自伝を詠んだ「安楽吟」の中において、否定的な形であえて「禪伯」と「方士」に言及したのか。その一において述べたとおり、もしも「安楽吟」が白居易を意識して作られているならば、この「禪伯に倭ねらず、方士に諛わず」には、白居易に対する揶揄の感情が動いていると考えられる。まず「禪伯に倭ねらず」。白居易は「醉吟先生伝」において、次のように記した。「凡そ酒徒琴侶詩客、多く之と遊び、遊ぶの外に心を釈氏に棲ます」。「酒徒」「琴侶」「詩客」のほかに「釈氏」を友とするというのである。邵雍は仏教をまったく受けつかなかったと言うわけではないようだが（後引の「聞見録」を参照）、「倭る」という表現には、白居易がふかく仏教を信奉していたことに対してのみならず、僧侶の間でもてはやされ、仏書中に登場することさえあったような仏教界における白居易流行現象⁽¹⁶⁾に対して、揶揄する気持ちがあった。おのれはそのようなことはしない。これが「禪伯に倭ねらず」と言い放った邵雍の真意である。次に「方士に諛わず」。白居易は、「新樂府・海漫漫」（卷三）の「雲濤 煙浪 最も深き処、人は伝う 中に三神山有り、山上 多く不死の薬を生じ、之を服すれば羽化して天仙と為ると、秦皇と漢武は此の語を信じ、方士 年年 薬を采りに去る、蓬萊 今古 但だ名を聞くのみ、煙水茫茫 覓むる処無し」に見られるとおり、「方士」に批判的であったが、白居易と「方士」といえば、白居易の文学作品のうちもつとも有名な「長恨歌」（卷十二）の次のくだりである。「臨邛の道士 鴻都の客、能く精誠を以って魂魄を招く。君王が展転の思いに感ずるが為に、遂に方士をして懃懃に覓めしむ」。「方士」が楊貴妃の「魂魄」を求め、仙界を訪ねることになった個所である。邵雍は神仙をよく詩のテーマにしているが、かれはこの地上と隔絶した別世界にあるという神仙を信じているわけでは、けっしてなかつ

た。「人は言う 別に洞中の仙有りと、洞裏の神仙 恐らく妄伝ならん」(「擊壤吟」卷八)のごとく、いわゆる神仙を「妄伝」と称している。白居易が仙界に楊貴妃の魂を求めさせる風に演出したことを、邵雍は虚妄と感じ、その点を突いて「方士に諛」うといった。

以上、断定的な口調で述べたが、はじめに記しておいたとおり、想像を交えた推論の域を出ない。ちなみに邵伯温は「禪伯に倭ねらず、方士に諛わず」に対して、「(康節先公は)文中子(周公篇)の仏を謂いて西方の聖人と謂うを論じて、以つて過ちと為さず。仏・老の学において未だ嘗て言わざるは、之を知りて言わざるなり」(「聞見録」卷十九)と解説した。仏が「西方の聖人」であることを認め、仏教のことは知ってはいたが、口にはしなかった、それが「禪伯に倭ねらず」の意味だと、いうのである。しかし、「倭ねらず」、「諛わず」という表現は、邵伯温がいうような仏(や「方士」)に対する邵雍の態度を第三者にむかつて弁明したものであるというより、仏に「倭り」、「方士」に「諛う」第三者の存在を意識したものであるように読み取れて、依然として気にかかる。

その三、「戸庭を出でずして、直ちに天地と際わる」。「際」は、交わる、会う、至る、極めるなどという意。「天地」は形而上的な意味の天と地。別の言い方をすれば「宇宙」。「宇宙は手に在り、万物は身に在り」(「宇宙吟」卷十六)、天地の心は我が心、これこそは、邵雍が生涯をかけて追い求めた道なるものの終極であつて、これは、第25句「善人を見るを樂しみ」以下、第32句「蘭蕙を佩ぶるが如し」までの一連の句に表現されている、道を求め得た人間の喜びの具体的内容とあわせて、おそらく白居易には見られない邵雍独自の実践哲学である。

(2)、白居易「快活」詩の一句「飽食安眠して 日月を消す」について。

白居易は、「快活の人」の生活にとつて欠かすことのできない要素に、「飽食」と「安眠」をあげたが、「食必ず常に飽きて、然る後に美(うま)きものを求む」、「食」に関しても邵雍は、白居易の生活様式を模倣しているらしい。白居易は「快活」詩以外に、さらに「長歌して時に独酌し、飽食して後に安眠す」(「閑吟」二首・その二)卷五十八)、

「已に開く 第七帙（すでに六十歳に入った）、飽食して仍お安眠す」（「愚旧」卷六十二、あるいはまた「食飽き 枕を払いて臥し、睡り足り 起きて閑吟す」（「食飽」卷八）のように、「飽食」と「安眠」をセットにして詠んでいる。このような白居易に対して邵雍は、嘉祐七年（一〇六二）、五十二歳のとき、「弄筆」（卷四）と題する詩において、次のように詠んだ。

行年五十二 行年 五十二

老去復何憂 老い去りて 復た何をか憂えん

事貴照至底 事は貴ぶ 照らして底に至るを

話難言到頭 話は難し 言いて頭に到るは

上有明天子 上に明天子有り

下有賢諸侯 下に賢諸侯有り

飽食高眠外 飽食と高眠の外

自餘無所求 自余は求むる所無し

第1句「行年 五十二」は、白居易の「四十五」（卷十六）と題する詩の第1句「行年 四十五」の模倣。第3・4

句の「事は貴ぶ 照らして底に至るを、話は難し 言いて頭に到るは」は、おのれはすべての事象を根底まで鏡で照らし出すかのように見通しているが、それを言語で言い尽くすのは困難であるという意味であろうか。ともかく問題は、最後の一聯「飽食と高眠の外、自余は求むる所無し」である。もう一例、「書事吟」（卷四）において

飽食高眠外 飽食と高眠の外

率^{カガモ}是皆虛名 率ね是れ皆な虚名なり

とも詠んでいる。「高眠」は、「觀盛化吟」（卷十五）に「人は太平に老い 春は未だ老いず、鶯花 日高くして眠るに

害無し」と詠まれているように、太陽が空高くのぼるまで安眠を食するという意味である。もとより白居易も「日高く睡り足りて 猶お起きるに慵し、小閣 裘を重ねて 寒を怕れず」(「香爐峰下に、新たに山居を卜し、草堂初めて成り、偶たま東壁に題す五首・その四」卷十六)のように詠っている。この「飽食」「高眠」思想が、やはり白居易の「飽食」「安眠」の影響を受けていることは明らかである。「子曰わく、飽食して日を終え、心を用うる所なし、難いかな」(「論語」「陽貨」)、「宰予(孔子の弟子) 昼寝す。子曰わく、朽ちし木は雕るべからず。糞土(くさった土)の牆は朽るべからず。(幸) 予に於いて何ぞ誅めん」(「論語」「公治長」)と、孔子は、飽食や昼寝をする人間をどうしようもないと歎いたが、腹一杯食べ、ぐっすり眠る、それは「快活」を信条とする白居易や邵雍にとつて至福の時であった。

注釈

(1) 邵雍の正式な詩数は、謝枋「略論宋代理学詩派」(「文学遺産」一九八六年第三期)所収によれば、一千五百八十三首。また「皇極經世」の巻数は、程明道「墓誌銘」(「伊洛淵源錄」所収)による。なお、「皇極經世」は、「皇極經世書」とも称し、いわゆる先天易学にもとづく邵雍独特の象数易学を展開したものであるが、歴史書としての一面も有している。唐明邦氏は、邵雍を哲學家・易學家・史學家・詩人と規定された。「邵雍評伝」26・27頁(南京大学出版社 一九九八年十二月)。

(2) 上野「伊川擊壤集」(明德出版社 昭和五十四年)は、その成果の一つ。また山内春夫「邵雍における杜牧」(「杜牧の研究」所収 藝文堂 昭和六十年)は、邵雍の詩人としての一面を知るうえで参考になる。

(3) 白居易は詩文の中では、醉吟先生とか榮啓期にちなんで榮先生とも称している。ちなみに「茗溪漁隱叢話前集」には香山居士、「同後集」には醉吟先生の名のもとに白居易を収める。また王禹偁は、「前賦春居雜興二首(以下省略)」詩(「小畜集」卷九)の「其の一」の一句「本與樂天爲後進」の自注において「予れ謫居してより、多く白公の詩を見る」と記していることく、白居易を指して白公と呼んでいるが、邵雍の詩には白公という表現もない。

(4) 西村富美子「白居易の後世の受容・影響」(『白居易研究講座 第二巻 白居易の文学と人生 II』所収 勉誠社 平成五年) 参照。

(5) 『増修詩話総亀後集』(巻九)「称薦門」に、「碧溪詩話」の次の文を収録する。「温公 自ずから迂叟と称す。香山居士も亦た嘗て以つて自ずから号す。其の詩(「迂叟」巻六十六)に云えらく、「初時 目して迂叟と為され、近日 呼んで隠人と作さる」と。司馬 豈に其の洛居して閑適の樂しみ有るを慕えるか。また司馬光は、白居易の「九老会」の先例にならつて、元豊五年(一〇八二)「耆英会」を組織している。宋衍申著『司馬光傳』(北京出版社 一九九〇年)二四九・二五〇頁に詳しい。なお、司馬光の白居易に対する関心の所在が、もっぱら「閑適」にあつたことを側面から簡単に補足しておく。司馬光の「独樂園七題」は、詩題の「七題」に示されるとおり、白樂天をふくめて七名の歴史上の人物を詠んだ作品である。これらの人物はそれぞれ、董仲舒・嚴子陵・韓伯休・陶淵明・杜牧之・王子猷・白樂天。そして「独樂園七題」冒頭の一句は、すべて「吾愛誰々」で始まる。この「吾愛誰々」は司馬光の独創ではない。唐の皮日休に「七愛詩」(「皮子文藪」巻十)と題する、やはり七名の人物を詠んだ連作がある。この七名の人物は、すべて唐代の人物であつて、房玄齡・杜如晦・李晟・盧鴻・元德秀・李白・白樂天である。そのうへ「七愛詩」冒頭の一句は「独樂園七題」と同様、すべて「吾愛誰々」で始まる。司馬光は「独樂園七題」を作るにあたって、形式的にはおそらく皮日休の「七愛詩」をヒントにした。問題は内容である。皮日休の「七愛詩」には「序」があつて、次のように記されている。「皮子の志、常に真純を以つて自ずから許す。毎に謂えらく大化を立つる者、必ず真相有り、房(玄齡)・杜(如晦)を以つて真相と為す。大乱を定むる者、必ず真將有り、李大尉(晟)を以つて真將と為す。大君に做る者、必ず真隱有り、盧徵君(鴻)を以つて真隱と為す。淺俗を鎮める者、必ず真吏有り、元魯山(德秀)を以つて真吏と為す。逸氣を負う者、必ず真放有り、李翰林(白)を以つて真放と為す。名臣爲る者、必ず真才有り、白太傅(居易)を以つて真才と為す。皮日休は白居易を「真才」ある「名臣」と規定したうえで、次のように詠んだ。「吾れは愛す白樂天、逸才 自然に生ず。誰れか謂う辭翰の器なりと、乃ち是れ経綸の賢なり。欬ち従う浮艶の詩、作り得たり典誥の篇。身を立てて百行足り、文を爲りて六芸全し。清望 内署に逸たり、直声 諫垣を驚かす。刺す所 必ず思ひ有り、臨む所 必ず伝う可し。形を忘れて詩酒に任せ、傲を寄せて林泉に遍し。望む所は文柄を握ること、希う所は化權を持つことなり。何ぞ期せん皆毀に遇い、中道に左遷せらるること多きを。天下は皆な汲汲たるに、樂天は独り怡然たり。天下は皆な悶悶たるに、樂天は独り旃(ゆた)を捨つ。高吟して兩掖を辭し、清嘯して三川を罷む。世に廻りて孤鶴に似、榮を遣てて脱蟬に同じ。仕えて若し志を得ざれば、龜鑑と為す可し焉」。皮日休はこの詩におい

て、「閑適」という一面のみならず、白居易の全生涯と全人格と全才能を描き出し、志を得ることのできない人物の「亀鑑」とすべきだといった。なお蛇足ながら、司馬光の詩は、具体例は省略するが、ほとんど白居易の詩文中の言葉を使つて作られていることを付け加えておく。

- (6) 入谷仙介氏は「閑適」について、「官僚の世界で得難い、精神的、現実的自由(中略)、この隱者的自由が「閑適」である」と指摘された後、「時間的に解放されていることが「閑」であり、精神的に解放されていることが「適」であろう」と分析された。「隠逸の境地」(二)にか 2 九九六 vol. 7 No. 2 大修館書店。

また郭紹虞は、次のように述べた。「照他这样讲, 他的诗应该是现实主义的诗了。但是他讲到情和物的关系就暴露了唯心的论调, 结果只做到了白居易的「闲适诗」, 没有做到白居易的「讽谕诗」, 因此也还是脱离现实的。『中国文学批评史』「四〇 北宋道学家之诗论」二二三頁(一九七九年版 上海古籍出版社)。邵雍の詩は現実主義的であるが、文学理論は唯心論的な論調であるという郭紹虞の批判はともかく、郭紹虞も邵雍の詩に、白居易の風諭詩ではなくて、閑適詩の影響を認めている。

- (7) 『聞見録』(卷十九)に「富公(富弼のこと)未だ第せざる時、(洛)水の北・上陽門外に家し、(洛)水の南・天宮寺の三学院に讀書す」と記されている。この文から考えて、「天宮寺の三学院」は、唐代の「尚善坊(里)」にあたる地域にあった。

- (8) 履道における邵雍の住居が、白居易の住居とどういう位置関係にあったのか、遺憾ながら、今のところよく分らない。ただ白居易の「池上篇の序」(卷六十)に「都城風土水木の勝は東南偏に在り、東南の勝は履道里に在り、里の勝は西北隅に在り、西開北垣の第一第は即ち白氏叟樂天退老の地」と記述されている。それに対して邵雍は、「寄せて三城太守韓子華舍人に謝す」詩(卷一)において「水竹 最も佳き処、履道の南偏」と詠んだ。邵詩が事実をどこまで正確に表現しているか、何とも判断の仕様がなないが、「南偏」と「西北隅」、正直に受け取れば、あまり近くではなかったと思われる。

- (9) 邵雍は嘉祐七年(一〇六二)、五十二歳のとき、「道德里(坊)」に引越しをした。「天津の新居成り、府尹王君貺尚書に謝す」詩(卷四)参照。また「聞見録」(卷十八)に次のように記されている。「嘉祐七年、王宣徽尹 天宮寺の西・天津橋の南・五代節度使安審琦の宅の故基に就き、郭崇の廃宅の余材を以て屋三千間を為り、康節に還りて之に居せんことを請う」。この一文から判断すれば、かれが「天津の新居成り、府尹王君貺尚書に謝す」詩の中でいう「道德里(坊)」は、どうも唐代洛陽の「道德里(坊)」が置かれていた場所とはちがって、「尚善里(坊)」が置かれていた場所にあたるように思わ

れる。木田知生「北宋時代の洛陽と士人達―開封との対立のなかで―」（『東洋史研究』第三八巻第一号 一九七九年）によれば「宋代洛陽は、大率、唐洛陽の都城プランを踏襲している」とされ、同論文の「北宋洛陽城街坊大略図」を見ても、唐代と宋代における坊名は、ほとんど変わらない。また注(7)に引用した『聞見録』には、続いて次のように記されている。

「〔寛〕公 政を致し、大第を至徳坊に築き、天宮寺と遷し。」「〔天宮寺と遷し〕と言え、唐代の「尚善坊」か「積善坊（里）」であるが、そもそも唐代には「至徳」という名の坊（里）はない。名称が変更されたのであろうか。

- (10) 白居易の詩は二千八百首ほど残っているが、汪立名「白香山年譜旧本」（『白香山詩集』所収）によれば、唐の宣宗が白居易を弔った詩が『唐摭言』（巻十五）に収録されており、その詩の一聯に「綴玉聯珠三千首、誰教冥路作詩仙」のごとく三千首と詠まれている。ただし、通行本『唐摭言』では、「三千首」を「六百年」に作る。

- (11) 『伊川擊壤集』八九頁。

- (12) 『四庫提要』に朱国禎「湧幢小品」の一文「仏語 衍がりて寒山詩と為り、儒語 衍がりて擊壤集と為る」が引用されている。この文は寒山と邵雍の影響関係について言及したわけではなく、また邵雍は仏教に関しては避けて言わなかったということだが、もし機会があれば、寒山と邵雍の関係について考えてみたい。

- (13) 『論衡』巻二十七「定賢篇」に次のような文がある。「龍逢・比干の忠 夏殷に著われしは、桀紂の悪なればなり。稷・契・皋陶の忠 唐虞に暗きは、堯舜の賢なればなり。故に螢火の明は、日月の光に掩われ、忠臣の声は、賢君の名に蔽わる。君の難に死し、命を出だして身を捐つるは、此れと同じなり。臣 其の時に遭い、其の難に死す。故に其の義を立てて其の名を獲。大賢の世を渉るや、翔けりて集まる有り、色みて斯に挙がる。乱君の患、其の身を累わさず、危国の禍、其の家に及ばさず。安んぞ其の禍に逢いて其の患に死するを得んや。」「論衡」に引用されている「論語」は、通行の「論語」の文と順序が逆になっているが、邵雍が「論語」の一文を使用した背景には、「論衡」に記されている「大賢」というような意識があったのかも知れない。

- (14) 「韓愈と白居易―対立と融和―」（『中国文学報 第四十一冊』九四頁 一九九〇年四月）。

- (15) 同右九五頁。

- (16) 宮澤正順「白居易の三教への態度」（『白居易研究講座 第一巻 白居易の文学と人生 I』一四四頁）参照。

